

芥川から堀辰雄へ

——人間自我の一系譜——

菊 地 弘

芥川はその作「大導寺信輔の半生」の中で封建的遺制そのままの形骸をとどめる「家」が、近代社会の中でいかに個人（人間）の実質を犠牲にさせているものであることを、見栄坊な形式主義にのみ専心する人間の真相を端的にえがいている。「体裁だけはいつも繕はなければならぬ彼の家の生活」は、あるとき親戚へ進物した「風月」の菓子折につめたカステラは、中味は「風月」どころか近所の安物のカステラであったというような、「けち臭い虚偽的」（片岡良一）で虚飾的形式主義の封建的思维的な生活風景をとらえている。そういう封建的残滓の日常生活故に、近代的人間自我による自主制をそなえた統一的な生に生ききる新しい人間生活というものが確立されてこなかった、そういうところからくる人間の生き方が当然家庭生活の中に暗い翳をやとさずにはおかなかつたことは必然であった。「トックの信ずる所によれば当り前の河童の生活位、莫迦げてゐるものはありません。親子夫婦兄弟などと云ふのは悉く互に苦しめ合ふことを唯一の楽しみにして暮らしてゐるのです。殊に家族制度と云ふものは莫迦げてゐる以上に莫迦げてゐるのです」（河童）と、トックをして「家」を

ささえる家族制度に対する辛辣な批判をしているのであるが、そういう芥川は結局「彼は或洋服屋の店に道化人形の立ってゐるのを見、どの位彼も道化人形に近いかと云ふことを考へる」（或阿呆の一生）境涯に立つほかなく、「家」を構成している家風や格式のやかましい封建モラルに寄生している権威に、「どうにもならなくなつた」救いようのない人生を覗じている芥川であつたのである。それ故に「人生は地獄より地獄的」と自照して人生への明るい可能をまったく見失つて絶望的虚無を感じていく生の姿がしめされてくるのである。

こうしたある種の敗北のよってくる理由が上記で触れてきたように、「家」をささえる封建性残滓からくるものであつて、ときにそれは「おぎん」「杜子春」その他の作品にあるように、血のつながりや家族関係の中へ自我処置（糊塗策）の安息所を見出してゆくことに連なるのであつて、しかし血のつながりや人情味だけではやはり人生に生ききれない問題にぶつかったときに、芥川の悲劇の第一歩があるのだが、で、そうした家族主義機構のなかで生きることとはもとより個性的なものや人間自我というものを否

定した、道化人形ぶりに一種の姑息的な生き方しか拓かせていかないものであるから、そういう姑息的な境涯から自我救済の最後によりどころとして、芸術完成への必死の努力をつづけてゆくこととなるのである。「すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を発してゐた。彼は妙に感動した。彼の上着のポケットは彼等の同人雑誌へ発表する彼の原稿を隠してゐた。彼は雨の中を歩きながら、もう一度後ろの架空線を見上げた。架空線に不相変鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかった。が、この紫色の火花だけは、——妻まじい空中の火花だけは命を取り換へてもつかまへたかつた」(或阿呆の一生)という悲愴な希求の姿態となつてゆき、「人生は一行のポオドレルにも若かない」とか、「人工の翼」という飛躍的イデアによる現実超克へと運なつてゆくことになるのである。命とすりかえても架空線の紫いろの火花——芸術への瞬間的な情熱、ひらめき、自我の燃焼——これだけは把握したいと希求する姿態、人生に完成はしなくとも芸術には完成がありうると信じる悲願の姿態があらわれているといえよう。自から道化人形ぶりをしなければ生きられないと規定する芥川が、人間自我を梗塞する根本的由来が、封建性残滓の存在故に、どうすることもできない家族主義モラルに、あるのだとふれていながら、それをほんとうに自己の内面の問題として考える主体吟味のきびしさへまで、徹底的に追求への意志的努力をうしなつてきているのであるから、人間主体意識と密接不可分の関係に依拠する芸術創造の思惟が展開されていくはずがなく、したがつて、命とすりかえても欲した架空線の紫いろ

の火花は、ここまでくると芥川の苦悩と焦慮のはてからでた吐息のようなものとしか感じられなくなつてきているのだといえよう。そうしてその苦悩と焦慮が、芥川の裡で奇妙な錯綜をかたちづくりに神経が交互に通じあわなくなつた結果が、芥川を死にまで追いやつた真因であつたと見られるわけである。自然主義の暗さを克服しようとして抬頭した白樺派の連中が、個人主義的な人間自我尊重に徹することで新しい可能性を主張しようとした。それ故に一面社会的現実性の稀薄なものをはらむ傾向にいたつたのであるが、そういう弊害をのりこえるためにもう一度現実を見なおそうと出発した新現実主義作家の連中が、そのグループの一人である芥川が上記で見たように近代の發展を阻害する封建性残滓の深さと、それと通じあう絶対主義権力にささえられた独占資本主義の圧迫と梗塞に耐えきれなくなつて自我を崩壊させていつてしまつたのであつたことが親じられよう。

そういう芥川の間自我屈服のあとを受けて文学的出發をした新感覺派の作家たちが、それこそはっきりとそれまでの文学や、なかならず人間自我とか個性の挫折の問題をもう一度主知的な思考方法によつた新しい角度と方法から探求すべき現実的課題があつたと思わされるのである。が、それがこの派の代表的作家である横光利一の「感覺活動」にせめかれたごとく、「新感覺派の感覺的表徴とは一言で云ふと自然の外相を剝奪し、物自体に躍り込む主観の直感的觸発」をいうものであり、「新感覺的表徴は少くとも悟性によりて内的直感の象徴化されたものでなければならぬ」というものであつたりして、もはやそれは直感的感覺を起点とし

対象自体のうちに滲透していくもので、そこから生命的な充実感を体験しようという性質のものであったがため、具体的な社会現実が生きる人間の自覚意識を主体とした「主観」や「直感」の強調というものかわりに、すでに見失われている人間主体の欠如と相即する社会的現実の歪みにおける直接的感觉であるがため、それ故にそのことは、瀬沼茂樹の言葉を借りていうならば、ジャズのモダニズムとして現出してきた判那的享楽主義の時勢の風靡に容易に結合して、そういう中に自我や個性を解体した文学作品を表現してくるのであったといえよう。人生に絶望の虚無の淵をのぞいたが故に「架空線の紫いろの火花」や「人工の翼」を希求した芥川が、結局はそれから求めえられずして「死」に自我を韜晦していったのであったが、そのご横光が芥川の「紫いろの火花」とか「人工の翼」を横光なりに変質させて、つまり芥川の未解決を「物自体に躍り込む主観の直観的触発」とか「悟性によりて内的直感」という操作で人間探求とか人間の内部現実の様相をえがきとらえようというものであった。しかし、「主観」や「直感」を強調して、対象を認識把握の基準の唯一のものとして尊ぶことがあまりにも露であったがため、容易に主観主義的な思惟、あるいは印象主義的な思考を色濃くし、「頭ならびに腹」「ナポレオンと田虫」その他でとらえられたように、映画的感觉とスタイルで飛躍的なあるいは暗示的な象徴的思念の性質の領域内にとどまり、あるいはまた前述したように、「主観」や「直感」の重要視が直接時勢の動きをそのまま受動的に認識肯定することにもなるのであるから、当時の社会的現実人間自我や個性を喪失したエ

ゴに生きる人間群を「絵模様化」した「日輪」ととらえられてあるような、肉体をふる舞うことよってのみ人間の喜びを感じる卑弥乎の生き方などが相当程度強く作の表に露にされてくる。つまり感覺的なテーマが好んで多く扱われてくることになるのであって、それは横光一人にかぎったことではなく、見給へ、人間自我の全的肯定を主張することから出発した志賀が「暗夜行路」の謙作で祖父と母の間に生れたことに苦しむが、やがてその苦惱から解脱して強く自我に生きようとするが、尾道から帰った謙作は「女のふくらとした重味のある乳房を柔かく握って見て云ひやうのない快感」をおぼえ「豊年だ、豊年だ」と言いながら喜ぶ空虚な生命感、また川端の「浅草紅団」の不良グループの連中の官能的なふるまい、あるいはまた都会中心主義に発達する資本主義社会からのがれて無秩序な北国のある地で自由奔放に踊り狂う人間群を、滑澄な感覺でとらえてみせた中河の「氷る舞踏場」など、いずれも梗塞多い現実からのがれてせめてもの感覺的な享楽に人間自我を韜晦させる、空しい生命感に生きている人間たちであって、そういう人間把握や手法がそれまでの文学から一種異様な目新しさを印象つけたことは故にないことではないが、そういう対象認識や手法の新しい形式から新しい人間創造が生かされてくることなく、もっぱら感覺の連想と主体性喪失の末期の人間像の表出であったのである。つまり、「主観」とか「直感」の感覺認識の範囲内にとどまり主観を通して対象を客観化するとか、人間や人生をより深く探求する拡がりをもつものにもまで発展的進展をしなかつたのである。芥川の自我の挫折の問題を横光を中心とする

新感覺派の連中が正しく人間主体の問題として徹底的に追求し、否定的媒介をさせながら新しい人生への開拓など及ぶべきはずのものとはならなかったということになるのである。かれらは巷に氾濫するジャズやレヴュの頹廢的な末期的社会的現実に相即して、人間自我や個性を喪失していたのであるとみられよう。この新感覺派末期の頹廢的な利邦的享楽主義の亜流でいくつかの文学グループの大同団結であったのが新興芸術派で、雅川晔の「芸術派宣言」、中村武羅夫の「誰だ、花園を荒らす者は」など、プロレタリア文学に対抗しての勇ましい進軍ラッパが吹かれたが、もとよりプロレタリア文学に対するさまざまな人たちが集まったという程度のもので、はじめからはつきりした文学的主義主張をかかげた文学集団ではなかったがため、頹廢的な社会的風潮と相應したエロティシズムやグロテスクなものを一層濃化してき、末期的な傾向を顕著化していくことになり、人間自我や個性の拡充、拡大などへの人間的努力はまったく喪失されていたのであったといえよう。そうした文学的時潮の中からにもかくにも人間自我や個性の確認、主体意識の恢復を発見して新しい生への肯定をうながしたのが堀辰雄の「聖家族」であったのだといえよう。それは、官能的なもの、あるいは感覺的なものの触発に格好な場所であるバアやカフェなどの非生産的なところの中に人間自我や主体性を解体しつくしていた「不器用な天使」たちから、ちようどそれは新感覺派や新興芸術派の連中が好んでえがいた官能的利邦的享楽に自我や主体性を埋没していたものと直接的に通じあうような性質をもつ世界であったが、そういう糊塗的な世界にいつまでも

自我や主体性を沈湮して時勢の動きに引きまわされることから立ちなおったところの、人間自我意識の覺醒をしめした画期的な作品であったのである。主人公河野扁理は九鬼（芥川）の暗示に動かされてどうしても自主的に生きえられない人間であった。が、ある町の海岸にたどりついた扁理はその波打際で醜い「犬の死骸」を見つめた瞬間、直感的偶發的な反發意識から新しい生の肯定を意識するのである。そのことはいままで九鬼の暗示に憑れていてどうすることもできなくなっていた、その意味から完全に主体性や自我喪失の境涯からの脱出を表徴するもので、この死から生への確認は稲晦に稲晦を重ね悲劇的な運命曲線をえがいた芥川の問題をとにもかくにも一応は克服し得たことを証すものである。その芥川の提起した問題を堀が克服できた理由の一つはコクトオの文学に傾情し撰取していたことにあると思われる。「私は断言する。芸術と政治とは同じ速力で進まない。革命の国の芸術はその革命だ。革命は詩人等を演説家と同列にする。革命は先見的な大胆、ピラ、パンフレット、一銭銅貨の心像を必要とする。革命の詩を詩の革命と混同してはならない」（堀辰雄訳、コクトオ抄）というコクトオのきわめて常識的な文学観であるが、しかし当時プロレタリア文学隆盛の気運の中では革命的な思いきった文学観として受けとめられたこととみられる。そういう一種高踏的な文学観が堀の芸術至上主義態度と表裏一体をなして、「ポエジイは贅沢を知らない人間には貧弱に見えるに違ひない。一個の詩は贅沢、即ち謙讓——貪欲の正反對——の極地だ。」（コクトオ抄）の受容的な理想方策を知覚することになる。ここから堀自身

のうちのイメージ、感覺等を蓄積しそれらをそつとさせながらしだいに内部發酵をしてくるのをまち、少しづつ連想の零屈氣が醸成されていく方法となるのである。つまり受動的なコクトオの文学方法と堀の受身的な抒情的主情主義とが容易に結び合った方法で、芥川の直面した現實的課題を克服していく進路を見出したのである。ここでもう少し道草をくって、堀が師芥川の人生をどのように裏返しにして生きていったかを見ておこう。堀は「詩人も計算する」のエッセイで、「芥川竜之助がポオドレルの一行を欲した気持は悲痛であった。しかし、何が彼をあんな絶望の中に落ち込ませたか、それは、一つは彼が詩人の一行と小説家の一行とを混同したためであるかも知れぬ。詩人の一行と小説家の一行とはおのづから異なるものである」と、芥川の悲劇的挫折の根本的由来を「詩人の一行」と「小説家の一行」との取り違いによつたものであるとみているのである。芥川は伝統的な家族主義の弊害を認めながら結局は血のつながりとか家族関係の強さを語り、人情とか人間味を尊ぶことで、そのことを中村真一郎の言葉を借りていえば「大家族の家長」となつて安息をしていたのであつたが、その安息所では処理しきれぬ問題にぶつかったときもつぱらたのむところは理智を機縁とした「人工の翼」を希求し、やがて焦燥に陥ちこんでいったということになるのである。だから芥川の文学は理智による秩序の芸術で理智美が多く感じられるが、ある種のふくらとした——つまり詩的イメージの豊かな芸術的人生的表現がみられない。そこが詩情美なり詩的感覚のうちに自我の船晦策を見出していつた同時代の佐藤春夫や室生犀星の文学

と異質なものであるわけであるが、そういう芥川の芸術なり生涯をみていた堀が「大家族の家長」になることを意識的に避け、また理智にたよる危険をおそれて「別のポドレルの一行」、つまりファンタスティックな詩的精神風土のうちに自我の安息所（糊塗策）を見出していくことによつて、「背中に背負いきれないほどすべてを背負いこんでいることを義務と信じていた」芥川の、それ故に瘦せ細つていく人生を、堀は避けることができたのであると思うのである。芥川とは別なポドレルの一行から作品創造の出発をした堀は人間的な主体的な創造的自我的はたらしを露にすることを、生来からの性質と自己抑制の精神からして好まなかつた。むしろ露になることをいみ嫌うある種の高踏的精神となつていたのである。そこから靜的な夢想による自我を詩的に主体化へ傾情させることになり外的事象を超克する方策をうちたてたのである。所詮、危機をはらむ生を社会的現實的な課題として根本的に追求していくかわりに、その前で靜止し夢想によつて主体的に克服する。そのために自我世界が謙讓な精神でくりひろげられていくことになるのであつて、そこに知的な諦観と感覺的情趣の観照が作の表につきまともつてくることになるのである。その点佐藤や室生、あるいはまた中河や横光の一部の作品にある感覺的なものの豊富な詩情美のみ追求して、そこに自我を船晦させ、或はそれに類層的な虚無的なものが絡みついたところからくる弱々しいかすかな道をつつくしんでいる生き方と感覺的に近い性質のもので、芥川の現實的苦惱に比すればその道はよほど糊塗的調和なものであつたことになるかと思う。またそれだけに現實的抵

抗の少ない人生を生きていくことを可能にしたものであることを思わずにはいられないのだが、いずれにしても芥川の人生の悲劇を凝視した堀が、芥川のそれと同じような悲劇を避けるために、社会的現実からうける不安や苦悩を超克していくための適当な処方箋として「謙讓な精神」を採択していくことで、苦悩や不安に新しい秩序をあたえ敵しい自己超克のいとなみが求められていくことになるのである。つまり、芥川の人生の挫折のよってきた根本的な理由を日常生活（社会的現実生活）へ自我を妥協させたためと親じた堀は、日常生活といっさい遮断して独特な詩的風土を想像力の働きによって結構していき——それは形而上学的な小宇宙といつてもいいかと思う——精神を統一化していったといえよう。そのことは同時に、日常生活の詩化に人間自我を輻照させていくことで、師芥川の不安と苦悩を超克していく方法とも連がりあうものであることは容易に考えさせられることである。したがってそのことは、堀の全作品に芥川の作品に見られるような自分の理智や感情を正面に押し立ててたかう気魄がみられないところから知られ、ひたすら感覚的なものの豊かな情緒的詩的風土に個人的な魂の体験が静かにしみじみとした抒情的詩的精神だけが姿を露にしてくることになるのである。そうした詩的風土を結構していくためにも、だから堀がまず最初に果さなければならぬことは、中村真一郎氏がいっているように、まず生活の選択というものであつたことは必然であつて、そこにおのずから堀の世界が狭く限定的なものでしかありえないことは否定できない事実となつてくるのである。そうして堀の世界の限定化は当然文学の限定

化、つまり狭さに直接通じあうものになるから、堀の文学の背景が浅間を中心とした高原であるとか、富士見のサナトリウムとかに規定されて、いずれも世俗的な社会的現実の視点からは直接にはかかわりのないところでの「生の持続」の場所であつて、その限定化した「生の持続」の「場」なるが故に題材の新奇にはとほしかったかわりに、選り出した主題の中で堀個々の内的真實さをえがきだしたことになると思う。日常生活の詩化という方法の限定化によつて芥川のぶつかった問題を克服することを発見したのであつて、堀の文学が生活詩化にもなつて感覚的な句や味わいの豊かな空想的抒情的抒情主義の姿態となつていき、したがつて格調の高い文体というものは柔軟な文体を連ねた弱々しい表現となつてきていることは明瞭であるだろう。

芥川のいきづまつた問題を芸術派として直接の後継者であつた横光を中心とする新感覚派文学の連中が、新時代に人生をもう一度人間主体内部に帰して吟味し見なおそうとするために、すでに上記で述べたように、横光の「感覺運動」に表徴されていたように、「物自体に躍り込む主観」とか「悟性によりて内的直感」というように主観の力を認めるものではあつたが、その主観の強調が人生そのものに深く浸透していく力とか、その力によつて客観を究明し改変させるほどの力にまで進展しないで、もっぱら主観を強調するあまりその当然のなりゆきとして人生そのものの追求からはなれた怪奇奔放な夢とか幻想、あるいは「ダイナミックな語法的改革」が飛躍的象徴的新奇さを人生になげあたえる、空虚な危険におちいらざるをえない芸術になつてしまふことにな

り、そういう人生の本質から隔心した芸術がそのまま新興芸術派の連中にうけつがれていくことになり、対人対人間において新しい意識をもって吟味され追求されるものは生れ難くなっていたのである。見給へ、この頃の作品で横光の「機械」が、高度に発達してきた機械文明に人間が傀儡化されて心にもない行動に動いていく自主性を喪失した人間のしがなさの実相を端的に反映させ、あるいはまたエロ・グロの頹廢的な生活面に沈湎している竜胆寺の「アバウトの女たちと僕」と「魔子」、さらに「どうする」ともできない「梗塞多い現実故に、牧野信一の「ゼーロン」その他に見られるような人生に自虐を必至のものとしたり、あるいはまた「山椒魚」以来自から環境を選択して風々飄々と人生を味わいながら生きていく、ある種の低徊趣味の井伏など、やはりどうにもならない現実で虚無を覗いたものから万止を得ぬナンセンス的な生き方であったのであるし、また新心理主義作家として瞳目された伊藤整がジヨイスやフロイドの影響を受けて「感情細胞の断面」一留の中の「キリ子」「M百貨店」その他など、人間の意識や心理の幾々までさぐりつくす方法を採用したものながら、結局は統一的新しい生の方向はえられず、やがて抒情的な感情に充ちた「生物祭」などが心理主義的方法の作品より成功をえていることなどから、その他あれやこれやと思ひあわせて見ると、いわゆるエロ、グロ、ナンセンスと呼ばれる時潮に主体性を見失っているとき、「聖家族」の生活詩化の限定化による問題克服への主体意識の恢復、人間自我の確認がそれが決して正しい方法による人間自覚意識の確認でなかつたとしても、とにもかくにも芥川の直

面した問題克服への一つの方法を発見したことであつたことは間違いないことで、神西清その他がすでにいっているように「新たな戦慄」をしめしたものであり画期的なことであつたといつていいと思う。

が、残念ながら問題克服への主体意識とか自我確認であつた「聖家族」もラファエロの絵がもつようなロマネスクな感情を色濃く浮ばせた額縁に嵌め込んだ一つの枠の中にあつての、人間自我や主体意識を確認する方法による芥川の問題克服がなされていることであるから、だからその問題克服の方法は正しい意味での、つまり芥川の直面した問題の所在をあくまで社会的現実という基盤を根底にしての否定的媒介をしていこうとする問題処理の仕方ではなかつたことになり、それ故にそのことがただちに客観的妥当性をもつ新しい生に生きる道へ拓けていくような性質のもではなかつたわけである。ある意味で画期的な作品であつた「聖家族」が、いま述べてきたように実際は正面きつた積極的な文学とまではならなかつたので、そういうものであるにはそれがあまりにもロマネスク化した心理の多すぎる小説であつたことや、純粋小説を造型する計算にあまり露でありすぎたことなど、いままらここで指摘するまでもあるまいとおもうのであるが、だから、そのごとにもかくにも恢復した人間自我とか主体性の面を、あくまでも時代的課題に即して発展的に展開させていく方向へ傾情する方法をとるかわりに、現実回避のうえにたつ「純」とか「聖」とかいうものの追求に傾情し、それだけ社会的現実の意味への定着がうすい、静かな額縁の中で生の充足を追求していく

ことになり、それ故に社会的現実感覚からは遠い虚無的な美への執拗な耽溺を色濃く瀆ました、つまりそれは時代の表面から一歩撤退した人生に生きるものであることは当然であって、人生の空しさをしみじみとかみしめながら危機と不安を美しい風土に囲まれた中で、あえかな人生や美を追求していく、「美しい村」の諷刺的自照主義に連なっていくことになり、それが人生的なものへの必至さからすべてを放棄した心のみが味わいうる感覚的なものの情趣的自照主義の心境を証するものであり、その心境の挙句には、「風たちぬ」のはかない生なるが故に美しいと感ずる「生」の讃歌を経て深く静かな人間とか人生を監視していく王朝ものへの世界に自己を導入していくことになるわけである。

こうした掘の生の道程を、ここで少々横道にそれるが、横光が大きな機械の力による人間の傀儡を描き、自主や自律のない人間の実相を端的に反映させて見せたが、そのかれが「紋章」で旧家の紋章を背負った無欲でお人好しの雁金を批判することから、知識人山下久内は「自由といふものは自分の感情と思想とを独立させて冷然と眺めることの出来る潤達自在な精神」を発見し得ることで、それまでの自己にまつわる危機をのり越したことを暗示したものであったが、その「潤達自在な精神」が厳しい現実批判の精神から勝ち得たものというよりは、直接的現実肯定の精神に依拠した「潤達自在な精神」であったが故に、ある何かに憑かれたように研究に没頭する雁金の行為と久内の思想を一致させる場すらもつことができず、それ故に人間改革とか新しい生への出発の強靱な原動力とはただちに結びつこうとしていなかっただけであ

る。したがってのちに「純粹小説論」をかくことになり時代の中に生きようとするものの「不安」と「懷疑」と「自意識」を正しく選択的統一的に処理しえない万止を得ない切実な必要から「四人称設定」を提起することになるのであって、そうした自己存在の不安がやがて「旅愁」の西洋的なものよりは東洋的な精神を強く肯定へと傾情しむくようになっていくことを考えながら、また人間自我の自由と能動をもって個性の伸長に生きてきた志賀が「暗夜行路」の東洋的自照主義への没入とかを考えながら、また「伊豆の踊子」以来空しい生を嘆賞的に描いてきた、そのほとんど一本道を歩いてきた川端が「抒情歌」「末期の眼」から「ものあわれ」の日本的感情を色濃く瀆ました「雪国」にいたりつく過程とか、あるいはまた谷崎が「源氏物語」の現代語訳に没頭するとか、昭和の初めに日本の抒情に訣別を告げた中野重治が再び「歌のわかれ」で日本の感性眼をとりあげねばならぬ外的にも内的にもいたましい悲傷を考えあわせてみた場合、そこに梗塞多い時代が彷彿されてくるのであって、なおこの場合十分妥当な例にならないかも知れないが、安閑として「描写のうしろに寝てゐられない」という高見順の新たな小説論の展開とか、フェルナンデスの行動的ヒューマニズムから小松清や阿部知二らの「行動主義」文学論なども、思潮の梗塞と圧迫からくるいづれも問題提起であったのであることを、ここで関連的に思いあわせてみれば、王朝的なものとか東洋的なものが、その憧憬や魅力となつてゆこうとする動向と、解決のつかない人生問題などに重苦しく拘泥しているより感覚的なものの情趣的な味や匂いに耽るとかいうよう

なもの、むしろそうした傾向と併行的なものとしてその思潮の近くに存在するのであったから、だいたい道草をくったが、一途に日本的感性に滲透する抒情に徹してきた堀が王朝ものへ惹きつけられてゆく必至さは容易に理解されるわけである。もとよりそうなってくる理由の一つが芥川の直面した課題を生活詩化の枠に入れた方策からであった以上、しかもそうしてそこからは、いわゆる純粹さや感覚化されたものへのゆたかな詩的美は高く評価されていいものにまでなっていることは否定できないものであるが、しかし芥川の行止りを超克するための万止を得ない自己処置であって、主観的な意識としては自己防衛策のきびしい精神から

とはいいながらも、やはり一種の現実回避の人生主義になると思われるし、そこにある種の諦視的な観照主義の人生態度が生れてくることなどは容易に考えられることなのであるし、一方、婚約者の死去なども絡みついてそれがいくぶん方法そのものをも変質させているのではあるが、空虚な人生のためにそれが上記の純粹とか感覚の一層の形象への沈湎などとなってきたのである。折口信夫のもとへ「源氏物語」の講義を受けに通ったり、一蜻蛉日記や「更級日記」に心惹かれてみたり、「宇治十帖」とジイドの「窄き門」のアリサを同位置において、その静かな清い一種の精神主義的な恋愛なり零細気に傾情をしたりすることなども、あるいは「ぼるとがる文」とか「アペラールとエロイズ」などいずれも中世の宗教的精神によった「恋する女の永遠の姿」に深く魅せられていく魂なども、かれらがいずれも人生に何か目的をめざして意志的な努力や情熱に生きる人間たちというよりは、純潔な

魂、静寂を愛する心、つねに夢の中にだけ生きる価値を知っている人間たちであるが故に、生活詩化に人間自我を縮めして人間のエゴ（我執）などはいっさい意識的に拒否して、——その点芥川はエゴを肯定した、「鼻」「羅生門」「枯野抄」その他エゴイズムの醜悪さを追求した。そうして人間に対してきわめて悲観的な洞察をしめした。堀は芥川のようなエゴをエゴとして捉え描くことを肉体的にも精神的にも嫌い、謙讓の精神がかれの作品の中で生かされた——。ただもっぱらとぎすました感覚を唯一のものとして空想的抒情的主情主義に生きようとした人生態度から容易に考えつくことである。

と同時にまた一方、この頃になって「幼年時代」の思い出の中から人生の本質のようなものを見出した、とする心的動向なども、社会的現実を回避し定まった額縁の中でだけ生きる価値を見出していた堀が、未来の人生の可能性を追求しようとするかわりにそれまでの人生の追想をして、かきとどめることによって人生を追体験し、あるいは夢的憧憬意識をより一層拡大しようとしたものと考えられ、そういう堀の内在意識が遠く古代文化の摂取とか王朝の世界へとかに魅せられていくことと、ここで関連的に考えあわせて見ていいと思うわけである。

このように、生の最後の拠点である人間自我を生活詩化の額縁の中へ縮めさせることで生きる方法を採用した堀が、それ故に感覚的なもの、味の味や匂いの情趣的観照主義を色濃く浮びして静かな諦視の態度になっていたものであったが、もう一度社会的現実的な主題にたちもどったのが「菜穂子」であったと見られよう。

「聖家旅」の主題がここでは伝統的な「家」核心主義の封建性残滓のためから、自主や自律のない矯飾的形式主義の人間をとらえ、そういう虚偽的な体面主義へ抑捺ををあげせながら内的に苦しむ人間像を描き、現実的な意義をもつ課題にとりくんだところに、それはたとえばその日その日が晩年であったと苦悶に生きた太宰が、芥川のように日常生活の中へも、堀的に生活を一定の方向へ規定していく中へも、そのいずれへも自我を糊塗しえずもみくちやにされ歪められた生活（人生）を味わいながら、「富獄百景」「東京八景」で捉えた個人的抒情的自照主義的な心境主義に安住を得ていたのや、伊藤の「得能五郎の生活と意見」のように人間自我を巧みなユーモラスな効果をだすかたちの中でとほけさせた生き方をしていたことなどと比すれば、とにかく再び現世的な主題をとりあげた堀の作家としての誠実さを感じなくもないものになってきているのである。封建的なモラルに憑かれていたため

世間態ばかり気にして自己の人生へはつきりと目的なものもの計皿をもって生きえられない主体意識の欠如した夫の圭介、圭介を背後から大きく動かしている姑の威力（家という伝統的な権威）、そういうものとの妥協的調和に生き得られない現実的で勝気な性格の菜穂子は、それ故に家からはじき出されることになり、やがて社会的現実の秩序からも追い出され孤独な人生を送ることになるのであるから、そこにはしじゆう「家」の問題にぶつかって悩んだ芥川と隣りあわせの主題があるわけであるが、芥川の場合、庄迫多い「家」の問題を扱った「玄鶴山房」にしても、作品の結末で従兄弟にリイブクネヒトを読ませることでもにもか

くにも新しい時代の到来を彷彿させていたのであったが、「菜穂子」の場合、わずかに吹雪の夜に彼女が療養所脱出するという事件にある種の自我意識を垣間見せたけれども、依然として孤独と静謐の中で人生に耐えながら生きる道しか残されていなかったのであるから、人生に明るい可能性のない暗い死の翳があるばかりであったといえよう。またそれだけに芥川の時代より一層深刻な時代の梗塞性を感じ知ることになると思うわけである。

ということと同時に、「浮雲」で文三の苦悩に正しい方向で解決をあたえる道標が打ち立てられず、本田丹の俗物性と封建的なものの見方や考えに鋭い批判をあげた透谷を自殺させたこと、藤村の「破戒」の丑松が感傷的な心情吐露をせざるをえなかった部落民に対する封建性などをはつきりと否定する近代の社会的現実の場をもたなかった近代日本の歪み、むしろそれを打破しようとして主に階級的立場に立つプロレタリア文学の勃興があり、それに関係して有島の「宣言一つ」などが発表された事実など、相当程度重要視されねばならないが、また一方、自然主義の行き止まりから立ちあがって出発した白樺派の人間自我尊重によった新しい可能性を主張し伸長していく動きもあったが、なおそこに非近代的な暗さを払拭しきれず、前近代的伝統と結びついて芥川の挫折がなされたことは、「浮雲」以来提出された問題をここで再確認しなければならなかったことであり、それから十数年後に芥川を越えた堀が、菜穂子を封建性の前にひざまづかせたことに一層近代の歪曲性を痛感させられることであって——ごくおおざっぱな図式化からみてのことだが——、そんなこともこ

で関連的に思いかけて考えて見てもいいことであろうと思う。
師芥川の死の姿を絶えず意識していた堀が、自己防衛策のための生活詩化に自我の安息所(糊塗策)を見出して生きてきたその帰結が、社会的現実性からは遠い孤独な領域へ追いつめられていき、それと相即して遠く古代への生命に惹かれる一種のローマン的憧憬など、それをいわゆる東洋的汎神論の世界に人生を消え去らねばならなかったというふうにもいえるであろうが、そういう道においてしか生きえられなかったところに批判と反省を要請す

るものがあるのであつて、芥川の直面した問題を根本的なところ
で主知的に計量して解決への真の意味での人間的な力にたたなかつた。もとよりそれが真の人間自我のあり方ではないことは明らかである。が、とにかく芥川からたどられた人間自我の一つの糸譜であつた事實は否定されるものではないと思ふ。
この論をかくにあつておにも次の本を参考にした。片岡良一著「近代日本文学の展望」「近代派文学の輪郭」

紹介

国語国文学研究史大成

芭蕉

全国大学国語国文学会の事業の一として企画された研究史大成の第一回配本として、第十二巻芭蕉が刊行された。本書は、井本農一、栗山理一、それに中村俊定教授が加つて成つたものである。内容は

研究史通観 江戸時代(発句・紀行・俳論) 井本、伝記・連句・俳文・書簡(中村) 明治以降(栗山) 覆刻研究文献(伝記・作品・俳論・作家論に関するもの三一点) 覆刻研究文献解説 研究書誌

研究略年表(明治以渡)

それに人名・発句・連句・書名雑誌名論

文名の各索引を添えたもので、全巻有益の中でも『冬の日』木枯巻、『猿蓑』市中巻、『炭俵』梅が香巻について、諸註を抜抄し、古来施された各句各附合の解釈吟味を一覧できる編纂方針は、便利至極で稀観文献の覆刻とともに本書の利用度をいよいよ高めることと信じられる。(U)

(A5判総ページ五三六ページ
定価七五〇円 三省堂刊)

源氏物語 上

同じく研究史大成第三巻として、阿部秋生、山岸徳平、それに岡一男教授の編著である。時代的には平安末期から江戸初期に至る、いわゆる古註に属する研究を取めてある。研究史通観(概説・批評の性格・作者成立擬作) 覆刻研究文献(五一点) 翻

刻研究文献解説 研究書誌 索引(事項・和歌歌謡) 「既刊・未刊を問わず、源氏物語研究史における根本的資料を採択」(凡例)している中でも、『源氏積』二本(前田家本・書陵部本)をはじめ『奥入』など研究史初期のものが正確な読解のもとに全文収録されているのは、たいへん有難い。凡例に述べるように、紙幅の都合で一部分収録にとどまったものについては、桐壺の巻に関する部分を中心に編纂されて居り、たしかに同一平面上で研究の推移を通覧できてよい。源氏物語研究に志すものの座右の書とするにふさわしく、それにつけても

(A5判総ページ四九二ページ、
定価七五〇円 三省堂刊)